

TAKE FREE

高島屋史料館TOKYO

「モールの想像力

ショッピングモールはユートピアだ

」

もつと楽しむ

19

冊

選書・文

大山 顕

01

『サイダーのように言葉が湧き上がる 1』
(MFコミックスアライブシリーズ)』

おおのいも(著), フライングドッグ(原著),
KADOKAWA

『サイダーのように言葉が湧き上がる 2・3』

(MFコミックスアライブシリーズ)』

おおのいも(著), フライングドッグ(原著),

スタジオ心(協力), KADOKAWA

『小説サイダーのように言葉が湧き上がる』

イシグロキヨウヘイ(著), 角川文庫

モールが現代の文化的土壌であることがよくわかる、傑作劇場アニメ。モールは、その巨大さゆえに土地の履歴に関係せざるを得ない。物語のクライマックスで解き明かされる、とある出来事は、モールの「ゲニウスロキ」とでもいうべき歴史と結びつき、世代をつなぐ。ただの青春物語だと思っただら間違いだ。これは謎解きの物語でもある。

品切

02

『ショッピングモールから考える』

ユートピア・バックヤード・未来都市』

東浩紀・大山顕(著), 幻冬舎新書

「モールの想像力」展の元になった一冊。モールについて論じたものというよりは、タイトルの通り

03

『モール』

小野啓(著), 赤々舎

同じ写真家として嫉妬する一冊。二〇年前から日本全国の高校生を撮り続けている小野啓は、被写体の彼らがモールを「フッド」としていることに気がつき、本格的に撮るようになったという。いわばこれは都市のポートレートなのだ。モールは「無個性」だって？ たしかにそうだろう。だって、人間の顔だってどれもよく似ているしね。

04

『われわれは地球人だ！ 1』

(アクションコミックス)』

高橋聖一(著), 双葉社

モール全体が宇宙船と化し「銀河鉄道999」ばりに異星をたずねていく。現代のモールとは何かをこれほどの確に設定した作品を他に知らない。

07

『生き残った6人によると 1・4』

(ハルタコミックス)』

山本和音(著), KADOKAWA

ジョージ・A・ロメロ『ゾンビ』の衣鉢を継ぐ、正統派ゾンビ／モール作品。パンデミックによって市民がゾンビ化する中、モールに立てこもる若い男女。大量の商品に囲まれてた状況で展開するのはリアリティショーのような恋愛模様。一種の災害ユートピアである。なるほど現代の『ゾンビ』はこうなるか、と不思議な納得感がある。

05

『クオンタム・ファミリーズ』

東浩紀(著), 河出文庫

現在のぼくらにとって「ありえたかもしれない過去・現在・未来」について考えることはとても重要だと思う。いまこそこの小説を読むべき。注目すべきは物語中、オリンピックの開会式に合わせて実行される同時多発テロの対象がモールであること。イデオロギーや階層、国境を越えて人びとが集まるモールが巧みに設定されている。

06

『自転しながら公転する』

山本文緒(著), 新潮文庫

現代の日本において、女性が置かれた「場所」がどういうものであるか。それを語るために選ばれた「場所」がモール。エミール・ゾラが『ボヌール・デ・ダム百貨店』で一九世紀末のデパートを舞台に描いたように、山本文緒はモールで二一世紀の

08

『フッドコートで、また明日。(コミックス)』

成家慎一郎(著), KADOKAWA

違う高校に通う、優等生風とギャル風の、キャラが違うふたりの女子高生。彼女らが放課後モールのフッドコートでおちあつてだべる。ひたすらふたりの四方山話が描かれる。すごくいい。フィクションではあるが、モールが若い世代にとって重要な居場所になっていることがよくわかる作品。

日本を描いた。まちがいなく名作として読み継がれる物語。

09

『ブロッコリー・レボリューション』

岡田利規(著), 新潮社

本書収録の『ショッピングモールで過ごせなかった休日』に「ショッピングモールに行きたくて行きたくてたまらない、なんてわけじゃないけど、どこにも行かないよりはずっとまし」という主人公の述懐がある。現実から地続きで入っていく空想の世界は、なんとなく出かける先としてのモールの浮遊感を思わせる。

10

『なぞなぞショッピングモールでかいもの』

ビオレッティ・アレックスandro(作),

303BOOKS

異星人が乗った宇宙船が不調を起こし、不時着。中から出てきた男の子は、地球人の女の子にモールを案内されて、地球の物品と文化を教えてもらう。モールが地球の典型として描かれ得ているわけだ。確かに、どこの国であっても、モールに行けば地球人カルチャーの平均値が分かるかもしれない、と気付かされてはつとする。

11

『サバービアの憂鬱』

「郊外」の誕生とその爆発的發展の過程』

大場正明(著), 角川新書

こんなに復刻がうれしい本はそうない。映画、小説、絵画、音楽などを手がかりに、アメリカの五〇〇年代の郊外社会・文化を批評する傑作。第二一、二二章でモールについて論じられている。作品を通じて郊外の相貌を明らかにし、同時に郊外を足がかりに作品を批評する。「モールの想像力」展は本書の子どものようなものかもしれない。

12

『創造の狂気 ウォルト・ディズニー』

ニール・ゲイブラー(著)・中谷和男(訳),

ダイヤモンド社

最晩年のウォルト・ディズニーは、都市建設に真剣に取り組んでいた。そもそも一九九五年に開業したディズニールランドが、彼の理想のアメリカを再現するものだった。興味深いのは彼の本棚には『明日の田園都市』と、モールの発明者であるビクター・グルーエンの著作が並んでいたこと。モールとテーマパークと理想都市はつながっている。

品切

13

『都市と消費とディズニーの夢』

ショッピングモライゼーションの時代』

速水健朗(著), 角川新書

「モールの想像力」展に協力いただいている速水健朗の代表作。現代の都市がいかに「モライゼーション」(モール化)しているか、そしてモールが都市をめざしたものであること。それらをその歴史と機能・形態から明らかにしている。重要なのは、この「モール化」が決して揶揄されるべきようなものではないこと。現代はモールの時代なのだ。

15

『新訳 明日の田園都市』

エベネザー・ハワード(著), 山形浩生(訳),

鹿島出版会

近代における東京の都市計画の思想の源流のひとつであるハワードの田園都市計画。田園都市線や田園調布といった名称にその名残があり、さまざまに論じられてきた、その原典の新訳。訳者・山形浩生の解説がとても分かりやすい。その思想が現代のモールにも細くつながっていることを思いながら読み返すと発見がある。

16

『一心同体だった』

山内マリコ(著), 光文社

女性同士の友情や連帯をテーマとする、いわゆる「シスターフッド」の物語。一〇歳から四〇歳まで、八人の女性が一章ごとに主人公として入れ替わり、一人称を変えて語られる構造が見事。現時点での山内マリコの集大成というべき作品。その女性たちの平成三〇年史の終盤に選ばれた舞台が、郊外のモール。現代日本を描くのにモールは必須だ。

14

『ショッピングモールの社会史(フィギュール彩)』

斉藤徹(著), 彩流社

一般向けに書かれたモールの歴史をまとめたものは少ない。本書は日本語で読める貴重なモール史の本である。モールを成立させる社会背景から、各デベロッパーの戦略などが分かりやすく整理されている。モールに興味がある人なら必ず読んでおくべき一冊。

団地団ベランダから見渡す映画論

大山 顕・佐藤 大・速水健朗(著)、キネマ旬報社

団地が登場する、という共通点だけで古今東西の映画、小説、マンガ、アニメ作品を並列して、都市論、創作論などに昇華させる、「モールの想像力」展の監修者もメンバーの、ふざけた名前のユニット。阿佐ヶ谷ロフトで不定期にトークイベントを行っており、本書はその収録。大量の作品を通じて知的飛躍を試みる展覧会の手つきは団地団ゆずり。

『商店建築2023年6月号』

商店建築社

今回、このブックフェアのための選書にたずさわり、あまりに日本語で読める一般向けのモールに関する書籍が少ないことに衝撃をうけた。特に、日本でも活躍した「現代的モールの父」であるジョン・ジャードイについて語ったものは皆無といい。ジャードイの孫弟子として、本誌にささやかながらジャードイについて書きました。

『東京人2023年05月号特集

「Tokyo百貨店物語」』

東京人編集室(編)、都市出版

「モールの想像力」展監修者のぼくが、評論家・文学者の鹿島茂さん、前回展覧会「百貨店展」監修・浅子佳英さん、そして実際にモールなど商業施設の設計を行っている日建設計の三井祐介さんと共に百貨店、そしてモールについて対談した記事が収録されております。今後、大型商業施設はどのようなものになるのか？

大山 顕

モールの想像力展：監修

1972年生まれ。写真家／ライター。工業地域を遊び場として育つ・千葉大学工学部卒後、松下電器産業株式会社(現 Panasonic)に入社。シンクタンク部門に10年間勤めた後、写真家として独立。団地研究家としての顔も持つ。執筆、イベント主催など多様な活動を行っている。著書に『ショッピングモールから考える』(東浩紀・大山顕 著、幻冬舎新書、2016)など多数あり。

セミナーのご案内

大山顕さんが「モールの想像力」展について
展示解説しているたっぷり2時間の動画、ぜひ
ご覧ください。



展示情報

モールの想像力—ショッピングモールはユートピアだ
2023年3月4日(土)～8月27日(日)
11:00～19:00 入館無料

高島屋史料館TOKYO 4階展示室
東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C. 本館
休館 月・火曜(祝日の場合は開館)



丸善日本橋店から 高島屋史料館TOKYOへの アクセス

中央通りを挟んで
向かいの建物です。

